

2021年1月1日(水) 元旦礼拝(11時～)

渋谷昌史

『キリストとともに共同相続人として生きる』ローマ人への手紙8章17、18節

皆さん、2021年を迎えましたね。新しい一年も主が私たち一人ひとりを導いてくださいますように。また主であり師であられるお方とともに歩めますよう、心よりお祈り申し上げます。さて、今日のみことばは私たちの教会が所属する「日本バプテスト教会連合」が2021年の主題聖句として掲げたものです。昨年11月3日に連合の予算総会が開かれましたが、新型コロナウイルス感染症のこともあり、連合総会も初めてのオンライン総会となりました。その際に理事長の先生がローマ人への手紙8章17、18節からメッセージを取り次いでくださいました。日本バプテスト教会連合の教会に属する私たち一人ひとりが、キリストとともに「神の国」の共同相続人として苦難を分かち合い、責任を担い合い、十字架の主を証しし、一緒になって主の栄光へ向かって歩いていきましょう、という切なる思い、そして主にある希望が語られました。皆さまにお配りしている連合通信は3月、6月、9月、12月に発行されますが、新しい一年はこのみことばでもって連合の4人の牧師が巻頭言を書いてくださることでしょう。新しい年の初めの日、私もこのみことばから、「キリストとともに共同相続人として生きる」という説教題でみことばを取り次がさせていただきます。キリストが私たちとともにおられること、キリストとともに共同相続人として生きられる幸いを、皆さまと一緒に味わいたいと思います。

1. 「お父ちゃん」と呼べる神

今日のみことばのローマ書8章17節は、12節からの内容を受けております。その内容をごく簡単に申し上げますと、イエスを主と告白し、イエスさまの弟子としてみことばに生きる者は、イエスさまからいただいた神の御霊、聖霊に突き動かされて生きる、ということが描かれています。クリスマスの時には「イエスさまこそ、私たちにとって人生最大のプレゼント」であったことをお話しました。「イエスさまこそ、闇の中でも消えることなく輝き続けるまことの光」でしたよね。しかしそれだけでなく、イエスさまとともに歩む者には、十字架の苦しみを味わわれ、死なれ、よみがえられたイエスさまから「聖霊なるお方」がプレゼントされたことも、私たちは実感していることでしょう。神の御霊なるお方こそ、私たちの心の目を開き、みことばの真理へと導いてくださるのです。

聖霊の導きによってわかることの一つは、イエスさまを信じる者は「神の子ども」とされる、ということです。15節にあります。私たちの内に宿る神の霊

によって、私たちは神さまのことを「アバ、父」と呼ぶことができるようになりました。お祈りする時を思い起こしてください。私たちは「天の父なる神さま」「天のお父さま」と親しみを込めて神さまに呼びかけますよね。口先だけでなく、「お父さん、聴いてください」って心を込めて祈ることでしょう。私たちはこのお父さんに時には喜びを伝え、時には悲しみや苦しみをわかってくださいと訴え、「なぜ、どうして？」と怒りをぶついたりもします。神さまが私たちの父であり、私たちは子であるという関係。なんだかとても大きく大きな特権をいただいているように思います。この「アバ、父」という言葉は、「アバ」がアラム語で、「父」がギリシャ語の訳語です。「アバ」という言葉は、当時のユダヤ人たちが話していたアラム語の「お父ちゃん」「パパ」という意味で、イエスさまもアラム語を話されていた、とされています。「父」に相当するギリシャ語はユダヤ人以外の異邦人、今を生きる私たちも、神さまのことを「お父ちゃん」と呼べるようになった、ということを聖書は語ります。「アバ、父。」とても短い聖書のおことばではありますが、主イエスの救いはユダヤ人だけでなく、信じるすべての人に開かれていたことがわかります。神の御子であられるイエスさまが「アバ、父」と親しみを込めて父なる神さまに呼びかけ、とことん語り合ったように、私たちも神さまのことを「お父ちゃん」と呼ぶことができるまでに近い関係にあることを、まずは感謝をもって心に留めましょう。

2. 神の相続人であり、キリストとともに共同相続人であること

ローマ書 8章 17節。子どもであるなら、相続人でもあります。私たちはキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているのですから、神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。何だか物凄いみことばの約束ですね。私たちが「神の子ども」であるなら「相続人」でもある、とのこと。「相続人」という言葉が心に留まりますよね。神さまのことを「お父ちゃん」と呼ぶことがゆるされている私たちは、神さまが持つておられるすべてのものを相続するのです。何を相続するのでしょうか？ それは、王なるイエスが支配する「神の国」、神がお造りになられた被造世界だと言えましょう。このことは、今日のみことばのあとに続く 8章 19節から 25節でも確認できます。「神の救いのご計画」は私たち人間の救いだけに留まらず、神がお造りになられた世界の回復にまで及ぶ壮大なものです。イエスを信じ、聖霊に突き動かされ、神さまのことを「お父ちゃん」と呼べるようになった者だけが味わうことのできる「神の国」を相続する。いや、私たちは、既に、今、キリストを王とする「神の王国」をキリストとともに相続しているのです。よみがえりのイエスさまを長兄、一番上の兄とする「神の家族」の兄弟姉妹とされた私たちは、キリストとともに「神の国」を治め、管理する務めを託されているのです。世の光として輝かせていた

だき、地の塩として生きる生き方でもって、目には見えない「神の国」を広げる働き、宣教の働きが託されているのです。いまだ完成には至らないけど、主イエスが確かに私たちの世界にもたらした「神の国」。私たちは、コロナ禍にあるこの世界に、今、生きておりますが、私たちに神さまのことを「お父ちゃん」と言わしめる神の霊、私たちの心の内に住まわれる聖霊なるお方は、私たちが聖書の物語の住人であることを教えてくれます。「神の国」の住人であり、キリストとともにこの国を治める共同相続人であることも教えてくれるのです。

それなら「神の国」を相続するための保証はいったいどこにあるのでしょうか？ その保証は「キリストとともにある」ということです。キリストを知らなければ、神がどういうお方なのかわかりません。神の霊に突き動かされることもありません。キリストが私たちのお兄さんであることも、神がお父さんであることもわかりません。今、「神の国」を生き、その「神の国」をキリストとともに建て上げ、管理する務めが託されていることもわかりません。「神を愛し、人を愛する生き方」、「神に仕え、人に仕える生き方」もわかりません。このキリスト！このお方は、私たちにとってどういうお方だったかという、どうでしょう、皆さん！ 昨年から味わい続けている**ピリピ書の 2 章 6 節から 11 節**に「キリスト賛歌」と呼ばれる次のようなみことばが記されていましたよね。**キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。それは、イエスの名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが膝をかがめ、すべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白して、父なる神に栄光を帰するためです。**

罪ゆえに神さまとの関係が断たれて苦しむ私たちを罪の支配から解放するために、キリストは、私たちの罪の身代わりとなって御苦しみを受けられましたよね。それだけでなく、神さまとの関係が断たれているという意味での「死」という状態から私たちを解放するために、十字架の死にまで従われたのです。神さまから離れてしまった人間、私たちのことをあわれまれたイエスさまは、「わたしの父のことを一緒になって『お父ちゃん』と呼び、親しく対話できるようにしてあげたい。わたしの父のところに戻って来て欲しい。わたしの父の子どもになって欲しい」という切なる願いをもって、イエスさまは私たちの世界に來られ、「神の国」の福音を語り、十字架へと向かわれたのです。しかしまことの光は闇に飲み込まれることなく、十字架上で確かに死なれましたが、死というものに勝利を

治めてよみがえり、「救いの道」を切り開いてくださった。いや、イエスさまは「救いの道」そのものになられたのです。苦しみの先に栄光が用意されているのです。私たちのありとあらゆる痛みや悲しみのすべてを、私たち以上に理解し、あわれまれ、寄り添ってくださるお方がキリスト・イエスなのです。

3. 苦しみの先にある確かな栄光

8章18節。今の時の苦難は、やがて私たちに啓示される栄光に比べれば、取るに足りないとは私は考えます。ローマ書に記された当時のローマ社会では、主と云えばローマ皇帝のことを指す社会だったので、「イエスこそ主である」とおおよげに告白しようものなら、いのちの保証がありませんでした。キリストを信じる人々は迫害の最中にあったのです。それでもその迫害の渦中にあったパウロは、今の時の苦難は、やがて私たちに啓示される栄光に比べれば、取るに足りないとは私は考えます、と語り、キリストを信じる者たちを励まします。キリストに心を向けさせるのです。聖書に啓示されている栄光は、キリストによって明らかにされます。みことばそのものであられるキリストとともに歩む者は、今も昔も変わることなく、十字架の先に復活があること、苦しみの先に確かな希望が用意されていることを知っています。私たちのことを私たち以上にご存じのお方が、再び私たちの世界に来られるということが、黙示録の21章、22章で約束されています。私、「今日、イエスさま来られるかな？ 今日、イエスさま来られるかな？」っていつも思うんですよ。それと同時に、今日、イエスさまが来られるなら、このお方のことを知らない人々がこのお方に出会って欲しい、と祈らずにいられないんですね。コロナは確かに深刻です。しかし、それでも先にある確かな栄光を知っている者にとっては、この苦難も、やがて私たちに啓示される栄光に比べれば、取るに足りないでしょう。コロナに対して過剰に恐れるのではなく、正しく恐れ、神さまから与えられているいのちを私たち自身が自分の責任でもって正しく管理する。私たちを通して、主のご栄光が現されるような生き方を一日一日と積み重ねていく。新しい一年も、皆さまとともに祈りつつ、「神のご計画」がますます明らかにされることを心から期待しましょう。この一年も、みことばに生きる一年でありますように。

(お祈りします)。愛する天の父なる神さま。あなたの素晴らしいお名前をほめたたえます。あなたが私たちをキリストとともに「神の国」の共同相続人にしてくださったことを思います。主なるお方とともに、痛みや困難の先にある栄光を見つめ、信じて歩む一年となりますように。主イエス・キリストのお名前でお祈りします。アーメン。